

満濃池

満濃池は、金倉川をアーチ型の土堰堤で堰き止めて造られた日本最大級の農業用ため池です。貯水量は 1,540 万トン、池の周囲は約 20km に及びます。満濃池は大宝年間（701～704）に讃岐国守道守朝臣（みちもりあそん）が創築し、弘仁 12 年（821）に讃岐出身の空海によって修築されたと伝えられています。その後、満濃池は堰堤がたびたび決壊し、復旧、荒廃の歴史を繰り返しました。

明治時代に入り、満濃池は近代的なため池としての歩みを始めることになりました。嘉永 7 年（1854）の地震により満濃池の堤防が決壊して以来、幕府領の榎井・五条・苗田の三村（現琴平町）では用水の手当がなく、植え付けに困窮していたため、榎井村百姓総代の長谷川佐太郎が明治政府に満濃池再築の嘆願書を提出し、高松藩・丸亀藩・多度津藩の間を斡旋、奔走した結果、明治 2 年に改修工事に着手することができました。工事は、高松藩執政の松崎洵右衛門の意見により、堤防西隅の岩盤に穴をうがって底ゆる（樋管）にすることとし、明治 3 年に石穴が貫通し、築堤が完成しました。この改修を基礎として、満濃池は明治から昭和にかけて、三度の堤防の嵩上げと財田川及び土器川からの導水などにより、現在の規模のため池になりました。

第一次嵩上げ事業は明治 38 年～39 年に行われました。水掛かりの北部で畑からの水田化が進み用水不足が深刻になり、明治 27 年の干ばつなどもあり、満濃池普通水利組合が事業主体となって行ったもので、この事業により堤防は 3 尺（0.91m）嵩上げされ、貯水量は 660 万 2 千トンになりました。また、堤防の西端にあった余水吐が東端に移設され、隧道式の放水路に付け替えられました。

第二次嵩上げ事業は昭和 2 年～5 年に実施されました。大正 13 年の干ばつを契機に再度の嵩上げの要望が高まり、事業は県営満濃池用排水改良事業として行われました。この事業では、堤防が 5 尺（1.52m）嵩上げされて貯水量が 780 万トンになるとともに、財田川から承水路とトンネルを通じた満濃池への導水、丸亀幹線水路の改修なども行われました。

第三次嵩上げ事業は昭和 15 年～34 年に行われました。昭和 9 年、14 年の干ばつを機に、昭和 15 年に土器川の水を貯留して満濃池に引き入れる塩野池貯水池の築造と満濃池の堤防嵩上げを内容とする県営土器川沿岸用水改良事業が着手されましたが、昭和 19 年に戦争の激化により中断されました。戦後、塩野池貯水池計画は土器川に取水堰を設けて満濃池に導水する天川導水計画に変更され、県営満濃池用水改良事業により、満濃池の堤防は 6m 嵩上げされ、貯水量は 780 万トンから 1,540 万トンに倍増されました。

満濃池は長年にわたってかんがい用ため池としての役割を果たしており、平成 28 年に国際かんがい排水委員会（ICID）により「世界かんがい施設遺産」に登録されました。

<参考文献：満濃池土地改良区「満濃池史－満濃池土地改良区五十周年記念誌－」2001 年、讃岐のため池誌編さん委員会編「讃岐のため池誌」2000 年など>



満濃池



世界かんがい施設遺産碑



(地理院地図に加筆)